ナシカ谷遺跡

大分県北部中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年

大分県教育委員会

ナシカ谷遺跡

大分県北部中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序　　文

今回調査の対象となったナシカ谷遺跡は国東半島の豊後高田市にあります。国東半島は六郷満山と総称される天台宗寺院を中心に一大仏教文化圏が形成され、発掘調査が行われた豊後高田市には多くの指定文化財や埋蔵文化財があります。

遺跡の同一丘陵上には智恩寺があり、古代末から中世にかけて信仰の中心施設であったと考えられています。近世には稲荷神社が創建されるなどこの地域は古代から中世、近世を経て現代に至るまで信仰、祭祀の場、また葬地であったのです。本調査で明らかとなった室町時代の集石墓は本県では希な例であり、大分の中世墓を考える上で重要な資料を提供したものといえます。

本書が、学術研究や郷土の歴史を正しく理解するための資料として、また、埋蔵文化財の保護と理解のために役立てば幸いです。

最後に、調査に御協力いただきました関係者の方々、地元のみなさまに対して厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

大分県教育委員会

教育長　田　中　恒　治

例　　言

1. 本書は大分県豊後高田市大字鼎に所在するナシカ谷遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、大分県北部中核工業団地造成に伴う事前調査であり、地域振興整備公団の委託を受けて大分県教育委員会が実施した。

3. 遺物の実測、写真撮影などは村上が行い、図版の作製、原稿の執筆・編集は小林が担当した。また、出土土器については県文化課宮内克己主査・後藤一重主査に教示を得た。

目　　次

第1章　調査の経過 …… 1
　第1節　調査の経緯 …… 1
　第2節　調査の組織 …… 1
第2章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
　第1節　立地と環境 …… 1
　第2節　周辺の遺跡 …… 1
第3章　調査の成果 …… 2
　第1節　調査の概要 …… 2
　第2節　A地区 …… 2
　第3節　B地区 …… 4
第4章　まとめ …… 4

挿図目次

　第1図　ナシカ谷遺跡の位置及び周辺遺跡分布図 …… 5
　第2図　調査地区・周辺地形図 …… 6
　第3図　集石墓上部施設実測図 (1/50) …… 7
　第4図　集石墓下部施設実測図 (1/50) …… 8
　第5図　出土遺物実測図 (1/3) …… 9

表目次

　表1　出土土器観察表 …… 10

第1章　調査の経過

第1節　調査の経緯

調査は大分県北部工業団地造成事業を起因とするもので、事前発掘調査として実施した。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である智恩寺遺跡東辺を一部含む丘陵約93ha.である。工事予定地は広大であるため、トレンチ調査を主体とする遺構の存否確認を行った。地形的には平坦な丘陵上部、緩やかな起伏とやや深い谷部が連なっており、各所にトレンチを設定して遺構の確認、遺物の分布・包含状況の把握に努めた。この確認調査の結果を受け、丘陵の北西部、及び南部の2カ所を本調査の対象とした。

平成6年度、調査についての協議を地域振興整備公団と行い、試掘調査を同年8月に実施し、同月終了。引き続き本調査を行い、平成7年1月に終了した。

第2節　調査の組織

調査主体　大分県教育委員会

総　　括　帯刀将人（教育長）、末広利人（文化課長）

調査主任　渋谷忠章（文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長）

調査員　　玉永光洋（文化課主査）、小林昭彦（同主査）、佐脇義敏（同主任）、五十川孝正（同主任）

第2章　遺跡の位置と歴史的環境

第1節　立地と環境

ナシカ谷遺跡の所在する豊後高田市は国東半島くびれ部に位置する。豊後高田市は北部に周防灘が広がり、東部は国東半島の山塊に連なる。北部から西部にかけての海岸部には広大な平野部が展開する。南部では、国東半島に源流を発する河川の一つである桂川が南東部から大きな蛇行を繰り返しながら北流する。河岸段丘には小規模な平野部が形成されている。桂川は河口から5km遡上した地点で北東へ大きく蛇行し、都甲川が合流する。遺跡は蛇行点を東から臨む丘陵地に位置する。

第2節　周辺の遺跡

遺跡の立地する同一丘陵の西には、県指定文化財の国東塔が所在する六郷山寺院の一つ智恩寺がある。平成2年度から平成4年度までの3カ年にわたって大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が周辺の調査を実施した結果、東部では9世紀代の瓦類が多量に出土し瓦葺堂宇の存在が考えられ、13世紀の梵鐘鋳造遺構が確認された。また中世末までに堀や土塁で構成される連郭状の居館と寺が形成されていることが明らかにされた。同一丘陵上では智恩寺と谷を挟んで南には辻遺跡が所在し、丘陵裾部には古代寺院の薬恩寺跡が想定されている。さらに南の桂川に開析された崖の上部は急峻な丘陵であり中世城館鞍懸城跡となっている。その東は緩やかな谷部に微高地が形成されている。ナシカ谷遺跡の南部、桂川右岸にカワラガマ遺跡等が所在する。桂川右岸の低位丘陵上には佐野古墳、光門1号墳、光門2号墳等の古墳が形成されている。その南部の急峻な丘陵には中世城館、西叡山高山寺跡などがある。このように中世遺跡を中心に濃密な遺跡の分布がみられる。

第3章　調査の成果

第1節　調査の概要

調査の対象地は東西1750m、南北70mと東西に長く、広大な面積であった。しかも谷部、丘陵部と多様な地形を含んでいた。このため試掘調査は効率性を考慮し、遺跡が存在する可能性の高い地点を選定したうえで、各所にトレンチを設定し、遺構の検出、遺物包含層の確認を行った。この結果を踏まえ2ヶ所の本調査地区を設定した。1つは丘陵西部のA地区、もう1つは南部のB地区である。A地区では中世の集石墓を検出した。B地区では江戸時代に創建された神社の痕跡を確認し、調査を実施した。他の地域では土器の小破片が散布している状況を確認したが、遺構の検出はなかった。

第2節　A地区

A－1地区

この地区は事業地の中央北部にあたり、西へ細長く延びる丘陵の尾根部である。検出された遺構は集石墓であり、標高約80mの丘陵頂部平坦面に位置する。集石墓は調査前よりすでに礫の一部が露呈していた。トレンチ調査を行った結果、周辺には遺物の散布もなく、遺構も検出されていない。集石墓が単独に形成されていたものと考えられる。

集石墓（第3・4図，図版1～8）

上部施設

集石墓は集積する礫が周辺に崩れて広がった状況から東西12m、南北5mの規模と考えられた。集石墓は3群の集積範囲が東西に連接した形状を呈する。西から1群は東西4.3m、南北3.8m、2群は径2m、3群は東西3.5m、南北4mである。集石の厚さは0.4m～0.6mほどであり、下部の主体部と対応する部分が厚い。下部の主体部と集石の関係は、1群が1号墓、その東側に接して2号墓、2群は3号墓、3群は4号墓を下部にもつ。本来的には、それぞれの主体部に集石が伴うものと考えられる。集石墓を構成する石には、径10cm～25cmの円礫および割石が用いられ、散在的に長さ50cm程度の比較的大きい石が配されている。割石は特に4号墓に主体的に使用されている。また、この集石範囲1群南の斜面に五輪塔の火輪が残っていたが集石墓に伴うものか不明である。

下部施設

この集石墓の主体部は4基あり、西から1号、2号、3号、4号墓と呼称する。

主体部の構造は、方形に数段の石積で構築された小規模な石室状をなすものと土坑の2種類がある。

1号墓　石室状の下部構造をもつ。平面形は方形を呈し1.8m×1.4mの規模である。長軸方向は北2度東を指向する。配石は長さ30cm～50cm、幅30cm～40cm、厚さ30cmほどの未加工の石が長辺を内側に向けて2段積まれた状態であった。この上に礫が積み上げられたと思われる。東辺南半部は配石を欠いており、2号墓構築時になくなったものと考えられる。南辺部の配石も二次的に移動している。内部の状況は粘質黒褐色土が5cmほど堆積するものの床面直上に石がみられ、礫が主体的に充填されたものと思われる。出土遺物として、床面の北西隅から短刀1点、土師質土器の細片がある。

2号墓　下部構造は土坑で、長辺1.6m、短辺1mの規模をもち、不整方形を呈する。1号墓を切って造られている。主軸方向は北24度東を指向する。内部は上半部に礫が充填し、下半部には黒褐色土主体層が堆積していた。底面は平坦である。出土遺物は底面から鉄釘が33点、土師質土器の破片、瓦器埦が検出されている。また、底部に小ピットがあり、炭化物混入土が充填していた。

3号墓　下部構造は土坑で、長辺1.6m、短辺1mの規模をもち、不整方形を呈する。壁の立ち上がりは低く東辺は北半部を欠いており残存度は低い。主軸方向は北9度西を指向する。土坑内には礫が下層から充填していた。また、底面の観察では、骨片は検出されていないが、弱い被熱痕跡が確認された。出土遺物として、土師質小皿7点、坏3点、瓦器埦1点が底面の北半部に集中している状態で検出された。

4号墓　石室状に石を配した下部構造をもつ。平面形は方形を呈し、1.2m×2mの規模であるが、南東隅を欠く。主軸方向は北1度東を指向する。石の配置は長さ50cm～70cm、幅50cm、厚さ40cmほどの未加工の石を用い、長辺を内側にして側面を造り、小口部は石の短辺を放射状に内側を向けて構築されている。内部には最下層に10cmほどの炭化物・焼土混入の軟質黒黄褐色土が堆積していたが、その上は礫が充填していた。出土遺物として、底面から土師質小皿7点、坏4点、北壁寄りに短刀1点、鉄釘の破片が検出されている。

出土遺物（第5図・表1，図版9・10）

遺物は内部主体およびそれを覆った集石の中や周辺から出土した。遺物には、土師質土器、瓦器、短刀鉄釘などがある。実測可能な土器28点、短刀2点、鉄釘8点を図示した。

1号墓出土遺物（第5図29）

土師質土器の細片と短刀が出土した。短刀（29）は切先の先端を一部欠損しているが、ほぼ完形である。錆化は顕著で木質などは残っていない。大きさは長さ28.7cm、刃長20.7cm、茎長8cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmである。

2号墓出土遺物（第5図1～3・31～38）

土師質土器（1・2）、瓦器（3）、鉄釘（31～38）が出土した。1・2は坏である。3は瓦器埦で深い形状を呈し、底部には高台をもたない。鉄釘は33点出土したが残存度の良好な8点を図示した。錆化が進んでおり詳細な観察は困難であるが、大きさはほぼ確認できる。長さは4cm～6cmとばらつきがある。短い例は完形品の31で長さ4cm、断面形は0.3cm×0.4cmの長方形を呈す。33・34は長さ5cm、35・36は6cmほどである。断面形状は32～34・36・37は長方形、32・38は正方形である。

3号墓出土遺物（第5図4～11）

土師質土器、瓦器が出土している。土師質土器は小皿4点（4～7）、坏3点（11～13）を図示した。小皿は口径6cm～6.6cm、器高1cmほどの浅い形状を呈す。瓦器埦（11）は深い形状を呈し、底部には低く退化した高台をもつ。成形技法に指オサエがみられる。口径15.8cm、器高5.6cm、底径7.4cm、高台外径6cmである。

4号墓出土遺物（第5図12～22・30）

土器は土師質土器と短刀が出土している。土師質土器は小皿7点（12～18）、坏4点（19～22）である。小皿は口径7cm前後で器高1cmほどで浅い形状を呈す。小皿の焼成は良好で、赤の発色が強い。坏は口径11.2cm～13cm、器高2.1cm～2.8cm、底径7.7cm～9cmと幅がある。短刀（30）は完形品である。錆化は顕著であり、木質などは残っていない。大きさは長さ36.1cm、刃長24.3cm、茎長11.8cm、幅は3.2cm～3.5cmと切先に向かって幅が広くなる。厚さ0.5cmである。茎には径0.5cmの目釘穴がある。

その他（23～28）

土師質の小皿（23～26）と坏（27・28）である。小皿は口径7cm～7.4cm、器高1cmほどの浅い形状をなす。23は体部の壁厚が薄く、やや外反味に立ち上がる。24・26は体部下端と底部の境が明瞭である。25は体部は丸く仕上げられており、内湾して立ち上がる。坏は共に11.5cm前後の口径をもち、28は器高2.2cmと浅い形状を呈す。内部主体以外から出土した遺物である。

A－2地区

A－1地区の南東部にあたる、丘陵鞍部2000m²の範囲において遺構の確認調査を行った。その結果少量の遺物は採集されたが、遺構は検出されなかった。

A－3～6地区

トレンチ調査の結果、遺構の検出はなかった。

第3節　B地区

B－1、3～6

当該地では、遺物の検出はなかった。

B－2地区

江戸時代に築かれた「中尾稲荷神社」が所在していた。調査によって、建物基礎部の礎石や石組みが検出された。遺物として、寛永通寶、陶磁器類などが出土した。残存していた石祠には「寛政九年」・「文化二年」の銘文が刻まれている。この神社は大正時代まで現位置にあり信仰の対象になっていたが、その後他所に移転することに伴い、廃棄されたものである。

第4章　まとめ

ナシカ谷遺跡で検出された中世墓の構造は、下部施設を礫で覆った外部施設をもつ集石墓である。集石墓は通常「火葬骨を埋葬して石で覆った墓」と理解されているが、ナシカ谷において火葬骨の検出は確認されおらず、土葬も否定できない。しかし被熱痕跡や炭化物・焼土は散見できるので火葬の可能性があることを指摘しておきたい。集石墓の時期については、出土した土師質土器・瓦器から14世紀前葉～中葉と考えられる。とくに瓦器については高台が低く退化したものと無高台の2例があり、前者は14世紀前葉、後者を14世紀中葉と連続する時期幅の中で位置づけられる。それぞれに伴う土師質土器は年代的に矛盾を生じない。墓地形成の順序については、遺構の重複関係から1号墓→2号墓、集石の被覆状態から4号墓→3号墓、遺物の年代から3号墓→2号墓が確認できる。

被葬者については、智恩寺との関係が想定される。智恩寺は13世紀後半から14世紀にかけて六郷本山本寺として整備されたことが考古学的調査・文献資料によって明らかにされている(文献1)。調査は現講堂の位置する台地を「堂山」、その西の谷部を「イヤの谷」、北西部の台地を「西城」、それと東に連続する台地を「寺屋敷」とする各地区を対象に実施された。成果として、寺院と居館・防御施設が確認され、宗教・政治的な変容が具体的に示された。付属する墓地については、寺屋敷地区周辺に戦国期の院主の墓地が形成され、天文二十四年(1555年)銘の寶篋印塔がある。他の地区においても時期的には不明ながらも五輪塔・自然石塔婆などがあり、中世を含む墓地の形成が想定できる。ナシカ谷遺跡は智恩寺を契機に形成された付属墓地のひとつと考えられる。

県内の類例をみると、豊後高田市其ノ田板碑（建武元年銘）の正面に造られた集石墓がある。小礫を比高差1mを越える高さで積み上げたもので、後世に改変された可能性もあるが出土遺物から13世紀代と考えられている。下部施設は土杭である（註1）。県南部では緒方町大字下自在の千人塚遺跡をみることができる。15世紀後半～17世紀前半に形成された180基の塚墓からなる墓地であるが、数基の集石を伴う例が確認されている（註2）。123～125、135号墓では、塚墓を拳大の礫で覆った集石がみられる。時期的には特定が難しく、墓地形成期間の幅の中で位置づけせざるを得ない。周辺地域では福岡県で良好な例が確認されている（文献2）。椎木山遺跡（文献3）は火葬墓が主体となっており、北九州市白岩西遺跡（文献4）では必ずしも火葬骨を伴わない木遺跡に近い例がある。いずれにしても本県ではまれな構造であり、ナシカ谷遺跡は中世集石墓の良好な資料を提供したものといえよう。

文献1　小柳和宏ほか『智恩寺』1992年、大分県宇佐風土記の丘歴史民族資料館
文献2　渋谷忠章「大分県における中世墳墓の展開」『考古学の諸相』1996年、坂詰秀一先生還暦記念会
文献3　上村佳典ほか『椎木山遺跡』1997,北九州市教育委員会
文献4　前田義人ほか『白岩西遺跡』1985年、(財)北九州市教育文化事業団
註1　県文化課栗原氏教示
註2　県文化課坂本氏教示

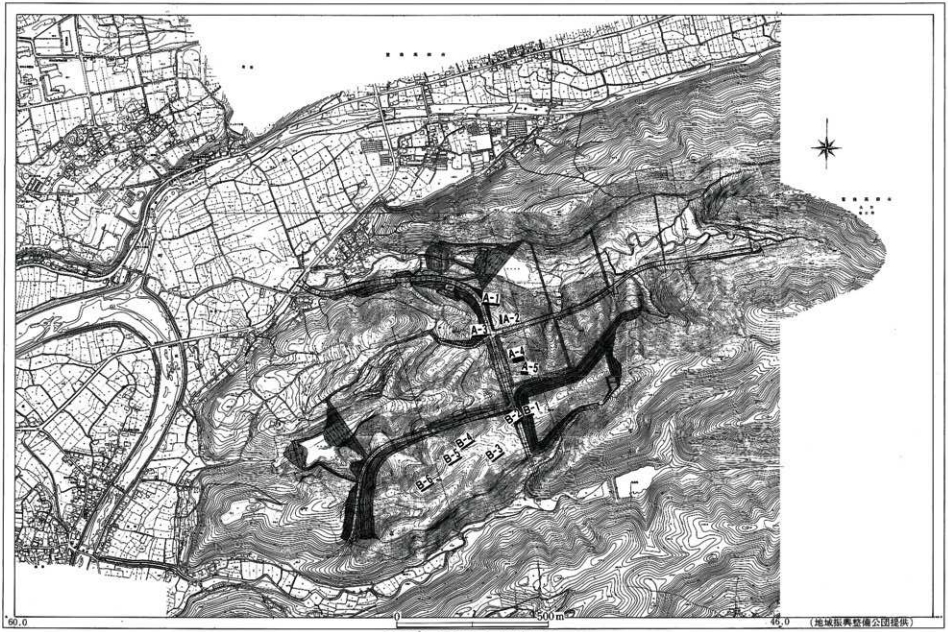
豊後高田市

遺跡番号	遺跡名	種別
006	二つ塚古墳	墳墓
008	草地金比羅山古墳	墳墓
009	草地金比羅遺跡	祭祀
011	黒松貝塚	貝塚
027	古城遺跡	城跡
029	柿岡庵跡	寺院跡
030	新寺庵跡	寺院跡
031	宝林寺跡	寺院跡
032	カナタノ板跡	生産
033	迫遺跡	生産
034	庄屋遺跡	館跡
035	長部遺跡	包蔵地
062	川原条里	条里
063	青宇田横穴墓群	墳墓
064	殿屋敷屋敷跡	館跡
065	殿屋敷遺跡	墳墓
066	富横穴墓群	墳墓
067	高宇田条里	条里
068	穴瀬横穴墓群	墳墓
069	雲鬼岩屋古墳	墳墓
070	大原鬼塚古墳	墳墓
071	三塚古墳群1号	墳墓
072	三塚古墳群2号	墳墓
073	三塚古墳群3号	墳墓
074	草地丸山遺跡	墳墓
075	弘田遺跡	集落遺跡
076	弘田鬼塚1号墳	墳墓
077	弘田鬼塚2号墳	墳墓
078	荒尾・弘田条里	条里
079	妙覚寺	寺院
080	智恩寺	廃寺院
081	知恩寺遺跡	包蔵地
082	辻遺跡	墳墓
083	黒部寺跡	寺院
084	西郡遺跡	包蔵地
085	森貝塚	貝塚
086	西田古墳	墳墓
087	丸山遺跡	祭祀
088	報恩寺	寺院
089	佐野古墳	墳墓
090	光門1号墳	墳墓
091	光門2号墳	墳墓
092	報恩城跡	城跡
093	カワラガマ遺跡	寺院
094	報恩城跡	城跡
095	宮田遺跡	寺院
096	塔ノ御堂	寺院
097	寺田遺跡	包蔵地
098	寺田今藤遺跡	集落
099	道田遺跡	包蔵地

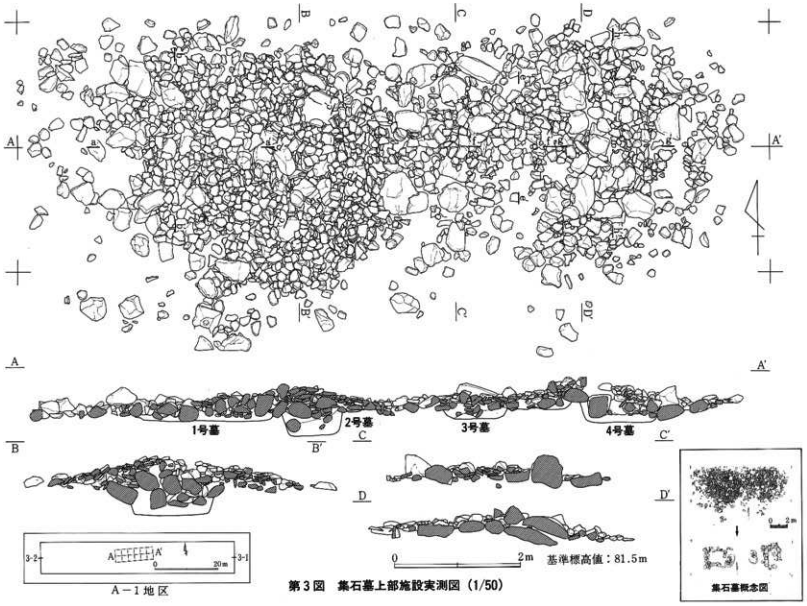
番号	指定名称	指定区分
008	青宇田画像石	県
009	穴瀬横穴群	県
010	智恩寺国東塔	県
011	塔ノ御堂板碑	県
027	長部板碑	市
028	寺ノ上板碑	市
029	塔ノ御堂国東塔	市

(『大分県遺跡地図』1993 大分県教育委員会より)

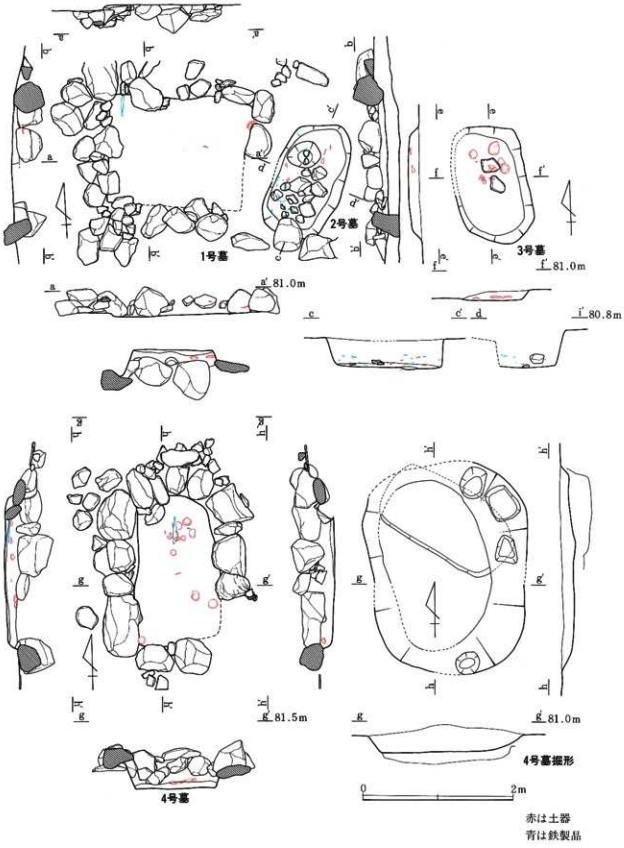
第1図　ナシカ谷遺跡の位置及び周辺遺跡分布図



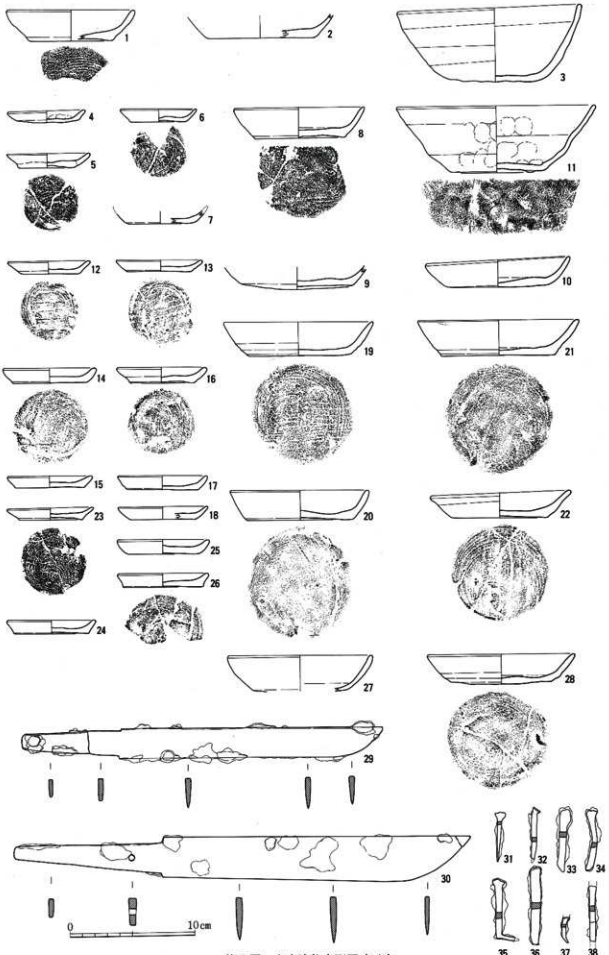
第２図　調査地区・周辺地形図



第3図　集石墓上部施設実測図（1/50）



第4図　集石墓下部施設実測図（1/50）



第５図　出土遺物実測図 (1/3)

表1　出土土器観察表

番号	器種	計測値 口径 器高 底径	技法・調査の特色	色調	胎土	焼成	残存度	備考
1	坏	(10.0㎝) 2.5㎝ (6.6㎝)	体部　横ナデ 底部　回転糸切り	内・外　橙	角閃石と雲母を少々含むが精緻	通有	口縁部ほとんど欠失	
2	坏	— —	磨滅のため調整不詳	内・外 黄橙	角閃石を含むが精緻	通有	口縁～底部1部残存	
3	瓦器埴	14.5㎝ 5.6㎝ 7.0㎝	内面・外面ともに横ナデと思われる	灰黄	角閃石（1.0㎜～3.0㎜） 黒曜石（4.0㎜）	不良	口縁欠失	
4	小皿	6.2㎝ 0.9㎝ 5.1㎝	口縁部～底部　横ナデ 内面　指ナデ	内・外　橙	角閃石・長石を含むが精緻	良好	口縁部1/3欠失	
5	小皿	6.6㎝ 1.2㎝ 4.6㎝	横ナデ	内・外断面淡橙色～浅黄色	角閃石を含むが精緻	不良　軟質	口縁部2/3欠失	外面　被熱赤変
6	小皿	(6.0㎝) 1.0㎝ 4.4㎝	体部　横ナデ 底部　回転糸切り	内 橙 外 黄橙～浅黄橙	角閃石・雲母を含むが精緻 黒曜石が2粒	通有	口縁部ほとんど欠失	
7	小皿	— — (5.6㎝)	磨滅のため調整不詳	内・外 にぶい黄橙～橙	角閃石を含むが精緻	通有	1/3残存	
8	坏	(10.3㎝) 2.4㎝ (7.2㎝)	体部　横ナデ 底部　回転糸切り、ナデ	内・外 にぶい黄橙～橙	角閃石・雲母を含むが精緻	通有	口縁～底部1部残存	
9	坏	— — (9.0㎝)	磨滅のため調整不詳	内・外 黄橙	角閃石を含むが精緻	不良	体～底部残存	
10	坏	11.4㎝ 2.1㎝ 8.0㎝	磨滅のため調整不詳	黄橙	角閃石を含むが精緻	不良　軟質	底部・口縁部1/2残存	
11	瓦器埴	15.8㎝ 5.6㎝ 7.4㎝	内面・外面指オサエ	内 淡黄～灰 外 明黄褐～褐灰	角閃石を含むが精緻	良好	ほぼ完形	
12	小皿	6.5～6.7㎝ 1.0㎝ 4.5～5.0㎝	口縁～体部　横ナデ 底部　回転糸切り	橙	長石（0.5㎜～1.0㎜）	良好	完形	内面～体部外面被熱痕
13	小皿	7.0㎝ 0.9㎝ 5.2㎝	口縁～体部　横ナデ 底部　回転糸切り	橙	長石微量	良好	ほぼ完形	外面被熱痕
14	小皿	7.4㎝ 1.2㎝ 6.0㎝	口縁～体部　横ナデ 底部　回転糸切り	橙	角閃石（1㎜）	良好	口縁部1/3欠失	被熱痕
15	小皿	6.8㎝ 1.1㎝ 5.5㎝	口縁～体部　横ナデ 底部　回転糸切り	橙	角閃石（0.5㎜） 長石	良好	ほぼ完形	被熱痕
16	小皿	7.1～7.5㎝ 1.2㎝ 5.1～5.5㎝	口縁～体部　横ナデ 底部　回転糸切り	明赤褐	角閃石微量 長石	良好	ほぼ完形	
17	小皿	(7.2㎝) 1.1㎝ 5.7㎝	口縁～体部　横ナデ 底部　回転糸切り	橙	長石（0.1㎜～0.5㎜）	通有	2/3残存	
18	小皿	(7.2㎝) 1.0㎝ (5.2㎝)	口縁～体部は横ナデ 底部は板状圧痕	橙	角閃石・長石微量	良好	口縁部ほとんど欠失	
19	坏	12.0㎝ 2.7㎝ 8.0㎝	口縁～体部は横ナデ 底部は回転糸切り	橙	角閃石を多量に含む（0.5～1.0㎜）長石（0.3㎜） 赤色粒（0.5㎜）	通有	ほぼ完形	
20	坏	11.2～11.9㎝ 2.3㎝ 8.3㎝	口縁～体部横ナデ 底部は回転糸切り	橙	角閃石を多量に含む（0.5～1.0㎜） 長石（0.5㎜）	通有	完形品	
21	坏	13.0㎝ 2.8㎝ 9.0㎝	内部　口縁～体部は横ナデ ロクロ痕顕著　底部回転糸切り	明黄褐	角閃石を多量に含む（0.5～1.5㎜）長石（2.0㎜） 石英（1.0～3.0㎜）	通有	口縁部1/2欠失	
22	坏	11.2～11.6㎝ 2.1㎝ 7.7㎝	口縁～体部横ナデ 底部は回転糸切り	浅黄橙	1.0㎜長石	通有	ほぼ完形	
23	小皿	7.0㎝ 0.9㎝ 5.1㎝	口縁～体部　横ナデ	内・外　橙	黒曜石1粒と角閃石を若干含むが精緻	良好	口縁部1/2欠失	
24	小皿	(7.1㎝) 1.1㎝ 6.0㎝	口縁～体部横ナデ 底部は回転糸切り	橙	長石微量 角閃石（0.5～1.0㎜）	通有	2/3	
25	小皿	7.4㎝ 1.1㎝ 5.7㎝	口縁から体部は回転横ナデ 底部は回転糸切り	橙	角閃石・長石を少量含む 赤色粒子多い	通有	1/3	
26	小皿	(7.4㎝) 1.0㎝ 6.4㎝	口縁から体部は回転横ナデ 底部は回転糸切り	にぶい橙	長石微量 角閃石（0.5～1.0㎜）	良好	1/2残存	
27	坏	(11.4㎝) —	横ナデ	内・外 灰白～にぶい黄褐	角閃石を含むが精緻	通有	口縁～底部周縁の1部残存	
28	坏	(11.8㎝) 2.2㎝ 8.0㎝	口縁から体部は回転横ナデ ロクロ痕顕著　底部は回転糸切り	明黄橙	角閃石（0.5～2.0㎜）	通有	口縁部1/2欠失	

写 真 図 版

出土遺物の番号は挿図番号と対応する

ナシカ谷遺跡全景（南東方向から）

集石墓全景
（南方向から）

集石墓西半部
（南方向から）

集石墓東半部
（南方向から）

集石墓発掘状態
（北西方向から）

集石墓発掘状態
（東方向から）

1号墓
（東方向から）

4号墓
（東方向から）

1号墓（南方向から）

1号墓北西隅短刀出土状態（西方向から）

2号墓（東方向から）

3号墓（西方向から）

4号墓（北方向から）

4号墓北辺部短刀出土状態（北方向から）

4号墓下部土坑（北方向から）

4

5

6

7

10

11

12

13

14

15

16

17

20

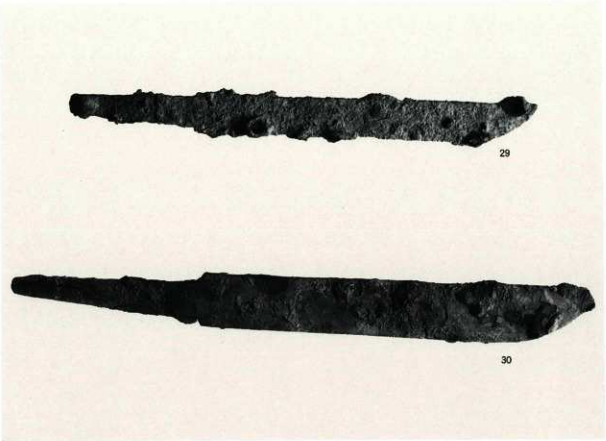
21

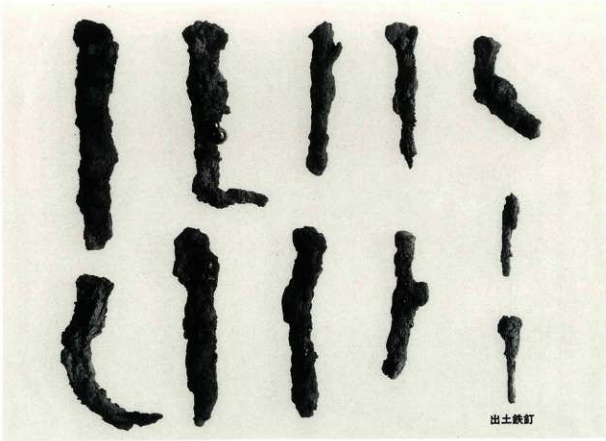
22

26

27

28


29
30


出土鉄釘

報告書抄録

ふりがな	なしかたにいせきはっくつちょうさほうこしょ
書名	ナシカ谷遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林昭彦
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-8503 大分県大分市府内町3丁目10番1号 TEL097-536-111
発行年月日	西暦1999年3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナシカ谷	大分県豊後高田市大字鼎	44209		33度32分58秒	131度29分8秒	940801～950131	25,000	工業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ナシカ谷	墓地	中世	集石墓	土師質土器・瓦器・短刀	墓構造は県内では僅少な例

ナシカ谷遺跡

大分県北部中核工業団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成11年3月19日

編集　大分県教育庁文化課
発行　大分県教育委員会

〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL　097(536)1111
印刷　有限会社 良栄堂